

# 1970年代の一流女性競技者のスポーツキャリア —面接法によるライフヒストリーの探究—

## Sport Careers of Japanese First-class Female Athletes in the 1970's: A Life-History Study Using Interview

キーワード：スポーツキャリア、女性競技者、ライフヒストリー、面接法

阿江 美恵子

### 1. 緒言

男女を問わず、競技スポーツ選手の引退年齢が遅くなっている。これは科学的なトレーニングと栄養、社会情勢の要因が大きいと思われる。他方、競技スポーツを引退する選手のキャリア移行の難しさも問題になっている。D. Alfermann (2007) は、スポーツでのキャリアの終了とその結果を明らかにしているが、その視点は不適應への介入である。阿江・掛水・雨ヶ崎 (1997) は、体育系T女子大学卒業のエリート競技者117名に郵送による質問紙調査により、競技引退の理由や、大学卒業後の競技との関わりなどを調査した。日本でも近年、スポーツ選手のキャリア移行を円滑に進めるための教育にやっと関心が芽生えてきている。反面、スポーツを長期にわたって継続した選手はさまざまな競技経験を通して成長しているはずだが、その点に関する視点は示されていない。

平成23年度のT女子大学の学内申請研究で、筆者は高等学校から大学に移行するときに、体育大学進学者でも重大な精神的な危機が生じるのではないかという仮説を立ててその様相を明確にしたいと考えたが、十分な結果を得ることができなかった。

また、筆者は、過去に大学まで競技スポーツを継続し、体育・スポーツの指導に身を置いた女性一流競技者の記録を残すことは研究者としての仕事であると近年感じ始めた。たまたま筆者の大学時代の運動部の先輩にその時代の全日本選手権大会を制した選手

がいたので、その人とコンタクトをとったことから、今回対象にした4名にたどり着き、本研究の着想を得た。

長期にわたるスポーツへの参加とその引退の問題が、どのような心理的な影響や発達につながっているのか、面接法によるライフヒストリーで明らかにできると考えた。1970年代のスポーツの一流競技者を対象としたのは、現役で教員を続けているものが1名のみで、ほぼキャリアの最終段階に差し掛かっているものの全く昔のことではなく、過去を振り返って評価的に自分を語る年代と考えられたことによる。また、本研究が理解できたからである。4名とも大学に進学したが、男女合わせて大学進学率30%くらいの時代であった。

以上を踏まえて、本研究ではスポーツとの関わりがその人のキャリア継続にどのような選択肢を与えたか、スポーツの才能の発達がどのようであったか、一流であることのどの部分が次の人生を支える力になっていたかをケーススタディとして明らかにすることを目的とした。4名対象ではあるが、ライフヒストリーからキャリア移行の問題にも迫りたいと考えた。

### 2. ライフヒストリーに焦点を絞った面接

本研究は、面接という質的研究法を用いた。従来、心理学では自然科学的厳密さを模範としてきたが、研究の客観性を高めるための基準を厳しくすることで、日常生活に活かされにくい研究を量産すること

になったとも指摘されている(フリック、2002)。彼は、方法論をいくら統制しても、研究者の利害関係や社会文化的背景が研究過程に影響することは避けられず、それらを組み込んで具体的な人や状況に結びついた知見を得ることが、質的研究の目指すところだと述べている。それが、近年の質的研究の増加につながっていると言えるだろう。

面接法を用いた研究は臨床スポーツ心理学領域で、競技者の内面に深く切り込んだものが見られる(中込、2012、江田・中込、2012)。また、オリンピック選手への望まれる心理的サポートについて面接によって明らかにした林・土屋(2012)の研究では、オリンピック直前の心理状態の難しさに迫っている。いずれも、競技スポーツの現役および引退直後の選手への面接で、そのことは競技スポーツ選手の今の心理に迫る意味がある。しかし、スポーツ選手としての時間は短く、その後どのような生き方があるのかを知ることは、スポーツ選手のアイデンティティ研究につながることが期待される。

本研究の対象者は若いときに競技成績に優れたスポーツ選手であり、スポーツを目的に大学に進学し、教員として体育指導に関わったキャリアウーマンであることから、スポーツとの関わりに焦点を絞った半構造化した質問項目を作成した。

面接で語られた内容は、個々の「語り」に焦点を置くのではなく、スポーツキャリアの流れ、分岐点を重視して分析した。語られた内容は、それぞれのスポーツとの向き合い方を規定するものであり、30年以上前の日本の女性競技スポーツ選手のその後の人生が示されたと考えられる。4名が全く独自の人生を歩

んだのではないので、可能な限り類型化を工夫した。個別の人生には多くの語られない部分があるが、そこを通り過ぎた現在までのスポーツとの関わり方は、一流女性競技者のキャリアを語るのに信頼のおけるデータであると思われる。

しかし、人数が少ないこと、選手環境が限定されること、出身大学の環境に考え方が影響されること、内容がばらついたことは研究の限界である。

### 3. 方法

質問内容：質的研究の方法としては、様々なインタビュー法があるが、本研究ではライフヒストリーに焦点を置き、キャリア移行に焦点を絞った半構造化質問紙を作成した。具体的には、競技成績、競技者としてのピーク、ライフヒストリー(小学校から大学卒業後の競技、職業経験まで)、競技者意識について、才能の開花した時についてなど、であった。深い内容としては、ピークに向かうまでの好不調の波から、スポーツに対する嫌悪意識の出現、ピークの出た理由、引退と引退後のスポーツとのかかわりなどを語らせた。

面接は各人の居住する場所に赴き、それぞれ2時間くらいインタビューした。インタビューは録音され、記述のまとめは、研究対象者に確認してもらった。

対象者：1970年代に大学で競技スポーツを継続し、卒業後体育教員となった4名の女性。競技力の高い国際レベルの成績の者2名、国内学生レベルの成績の者2名であった(表1)。

面接時期：2012年1月、および2013年2月。

表1. 面接対象者

年齢	高校の最高成績	最高成績の時期	当該種目の引退	卒業後の進路	競技で悩んだ時期	スポーツへの関わり
63歳	国体2位	26歳	26歳	教員高校 50歳くらいで退職	大学、教員になった数年	楽しみで
55歳	インターハイ 3位	27歳(オリンピック出場)	29歳	教員中学 継続	大学	中学生の強化
63歳	インターハイ 団体4位	高校3年	大学卒業で引退	教員高校 定年まで勤める	大学全般	審判、県の当該種目の中心的役割 他種目でマスターズ優勝 50代後半でマスターズは一応引退
63歳	インターハイ 5位	高校3年	結婚のとき	教員高校 結婚のために退職	大学、ケガ	マスターズ出場を続ける

## 4. インタビュー結果

面接は録音し、文章に変換した。できるだけ同一内容の順番に記述するようにしたが、話の進み具合により十分な状況を知ることができない対象者もいた。記述は逐語ではなく、要約して掲載した。

図1から4は、横方向に各自の重要な年齢時期を示し、縦にその時の競技成績の高さのイメージを示したものである(上に行くほど成績は良い)。これらの図は面接内容からの筆者が作成したイメージ図である。

### ①Aさん

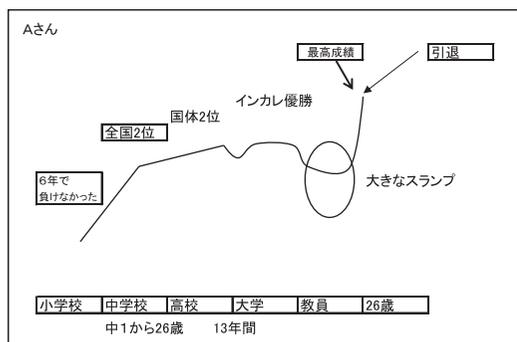


図1. Aさんの好不調のイメージ

### 【成育史】

#### 小学校(地方都市公立小学校)

とくにスポーツ活動なし。外遊びは大好き。運動会では身体ができてきた6年生で際立って速かった。中学年までは他の速い人に負けていた。それまでは痩せていた。6年生で身長154cm。今は162cm。

#### 中学校(公立中学校)

最初はバレーボール部に入っていたが、すぐに陸上部になってしまった。中学生ですでに県では一番速かった。中1で100m 13秒2(全国7位)、中学3年12秒6(全国2位)。先生は陸上の専門家ではなかった(体育の先生ではなかった)。冬はバスケットボール、中2で県大会出場、高校生で日本記録を出した後輩のXさんみたいにはトレーニングしなかった。先生に練習などで叱られた覚えはない。

#### 高校(県立高校)

陸上を続けるために進学。中学で12秒の終わりの

成績でも高校で11秒を出すと意欲をもっていた。専門的にトレーニングした。最高タイム12秒3(1年生)。そのあとまでずっとこの成績だった。ただし全日本で決勝に残るまで力がついてきた。高校は進学校だったので、授業7,8時間。新設校で追いつけ追い越せと勉強を頑張っていた。気持は勉強中心。ただし部活動もさかんで文武両道は当たり前という雰囲気だった。陸上部も人数は少なかったがみんな頑張っていた。創部2年目で地元の生徒だけでリレーでインターハイ4番になった。在学の高校生が3名入ってリレーで国体で優勝。出場したインターハイは5番が最高。どんな大会も優勝を狙った。優勝できないと悔しい。3年間インターハイ、国体出場。高校では国体の100m2位が最高。

#### 大学

東京に出ようと考えていた。体育の教員になるしかないと思っていた。陸上を続けるにはそれしかなかった。進学と決めていたので、実業団からの勧誘は断った。大学の環境はよくなく、自炊が一番大変だった。練習メニューは、自分で考えた。高校時代は先生のメニューをするだけだった。大学で最初の1年はいい加減だったが、関東インカレ2位(1年)。所属部は女子は3名だけであった。自分のことしか考えていなかった。T大学のような組織的な練習ではない。先輩にもっと頼れば良かったかもしれない。2年目から自分でこうやるというのができた。大学1年の終わり、朝から晩まで練習した。週2回の休みは筋トレをしていた。結果が出て、2年でインカレ優勝(200m)したが、記録は良くなかった。記録が学生時代伸びていない。大学4年12秒0(地方大会)が最高。国際大会は大学時代1回も出ていない。めぐりあわせが悪かった。勉強との両立を考えるとあまり勉強していない。しかし大学1,2年では1日1,2時間復習をちゃんとしていた。

走りの特徴。けりが強い、力が強い、スタートダッシュが速い。高校では筋トレはほとんどやらなかった。大学2年で週2回か3回筋トレをやった。ピッチが速い(「月刊陸上競技」でストライド走法と評されているが、本人はピッチが速いという感覚を持っている)。200mのほうが得意。100mは緊張のコントロー

ルが大変。ピークを過ぎると加速力がなくなってきた。  
大学卒業後

卒業後すぐ教員になった。(陸上競技界では知られた存在であったろうが、今ほど雑誌やテレビが注目することが少なかった。)健康管理などが甘かった。そのためにピークが短かった。

100mのペースをつかんだのが26歳くらい、力まなくても進む。ある程度スピードが出たらそれ以上力んでもスピードがあがらないことが感覚としてわかった。26歳になり、1日3回練習した(夏休みに早朝、午前、午後の3回練習)。若い時は勝ちたいという気持ちばかりあせて、ペースのことは考えていなかった。最高成績26歳で11秒7(100m)、24秒5(200m)、初の国際大会日中対抗(日本開催)で400mリレー出場。

#### 【現在のスポーツとの関わり】

週3、4回ジョギング20分以上。フラメンコ風のダンスを週1回習っている。脚力が強いので大きな動きができる。ダンスは得意ではなく大学4年くらいでやっと踊れた。

<競技が嫌になったことは?>ピークの来る少し前、もうやめようと思った。結婚は30歳。就職後は国体だけは出ようと思った。場所も時間もあったが、モチベーションが下がっていた。

#### 【トップランナーになった要因】

両親とも運動会は速かった。自分の子どもはリレーの選手になるかならないかくらい。性格が要因だと思う。負けず嫌い。結果が必ず出たので、ますます頑張る。困難なことでも続けていけば何とかなる、と思う気持ちがとても強い。今でもそうだ。やればなんとかなるはずだ。やれば必ず結果は出る。うぬぼれが強いのかな。勉強を中学2年くらいで始めたら、急に成績があがった経験が大きい。

<不安傾向は?>不安より期待が大きい(大学進学の時)。

<試合での緊張は?>緊張をコントロールできたのはずいぶんあと。硬くなりすぎて思い通り走れなかったことが何回もあった。短距離は精神的なものが大きい。

#### 【女性アスリートとして大変だったこと】

生理が煩わしかった。高校時代は練習ができない

くらい重かった。子どもを産んだら解消された。

教員として、年休を取りすぎだと言われたことがある。仕事との両立が大変。高校の名前で試合に出て、高校に貢献していると思ったのに、評価されていないと思った。陸上関係者から引退を期待されたことはない。

#### 【引退の理由】

後輩が出てきたことが引退の引き金にはなった。練習しすぎて故障も出てきた。そしてもっと伸びるとは思えなくなった。

#### 【陸上の指導者として】

すでに顧問がいると陸上の指導ができない。バレーボール部や新体操の顧問になったこともある。陸上部のない学校もあった。子育て中で責任が持てない、通勤時間が長い学校もあった(54km)。(指導以外のことが忙しいため指導に関心がむかなかつたようだ。)

#### 【才能の伸ばし方】

考えたことがない。強かった後輩は陸上を高校でやめて、大学でダンスをした。高校で結果を出してしまった人間だ。性格、刺激を与えてくれる周り(指導者、言ってくれる人)が必要。他のことに興味を持ったり、けがができなくなることがしばしばある。一番は指導者だと思う。自分が選手を指導していないのでわからない。

家族の支援が重要。母が生活支援、栄養管理、マッサージをしてくれた。

#### ②Bさん

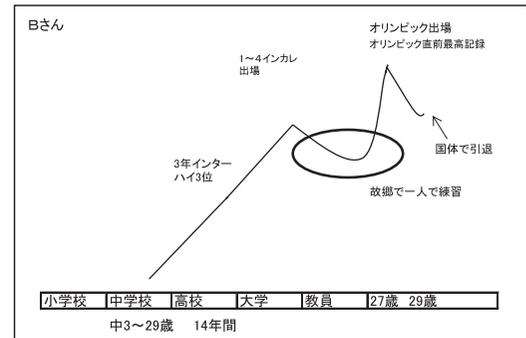


図2. Bさんの好不調のイメージ

T県陸上競技協会 女子部副部長

**【最高成績】**

59m58 (1984年オリンピック直前 27歳のとき) T県の常勤中学校保健体育講師、旧ヤリでのT県記録達成

**【自分の考える競技者としてのピーク】**

大学がピークと感じていた(大学では1年～4年までインカレ出場)

**【成育史】**

小学校(地方都市公立小学校)

特定のスポーツ活動に参加することはなかった。3人兄妹(男、男、自分、つまり末っ子)、父はすもろが強かった(町内会大会など)。

中学校(公立)

1年ソフトボールサード、2年卓球、3年無所属。ソフトボールがおもしろくなり退部、2年で卓球部に途中加入したが、1年間の差が大きく、練習の時に引け目を感じてしまい1年で退部。そのことで、心が弱いとずっと思っていた。口数は少ないが勝気であった。先生に肩が強いと言われ、3年の時に中学校対抗大会で砲丸投げに出場、上位入賞した。出場したことが心に残っていた。

高校(県立)

チームスポーツは向かないと思うようになった。陸上は中学校3年の時の大会出場をやってみたく思ったが、躊躇していてすぐ加入することができず、5月にやっと入部した。最初は砲丸投げ、次に円盤投げ、次にやり投げを始めたが、1年の秋の新人戦でやり投げで県2位になり、2年春で県1位となったが、インターハイは出場できなかった。3年で初めてインターハイ(東京開催)出場、全国3位になった。大きな大会になると勝てなかったため、心が弱いと思っていた。3年生の時はなんとしても東京に行きたいと思ったことが、大きな動機づけになった(と思っていた)。

大学

高校の先生にTJ大学を勧められた(環境、良い指導者という意味)。やり投げの成績向上と教員になることを目指した。やり投げブロックは当時7～8名はいた。入学後、記録は順調に伸びた。1年先輩に当時の大学チャンピオンのSさんがいた。Sさんに強い競争心を持ち、練習中もじっと観察して技術などを

盗もうとした。指導者は、Sさんだけを特別扱いしているように感じられた。先生から受けた指摘は、そこだけを修正しようとしてバラバラな動きになってしまうことが多かった。どうしてそのような指摘をするのかを聞くことはしなかった。

陸上競技との向き合い方は、陸上部の寮に入り、陸上中心の生活であった。よく食べて、身体は60kgが70kgまで大きくなった。

**【アスリートとしての特徴、優れている点】**

投げ方は力投げだった。大学1年の時、試合が近いので投げるな、と言われていたのに投げてしまい、肘を故障した。インカレ直前で、試合には出たが、痛恨の結果であった。肩が強かったのであまり考えずに投げていた。走りや投げの一体化が重要だと気がついたのは、卒業してから。卒業後、一人でのんびり練習をするようになって、いろいろな方のアドバイスを飲み込んで考えながら投げたことにより、オリンピックまでつながった。

**【勉強との両立問題】 問題なし****【オリンピック選手であること】**

これは大変な誇りで、強い意志がないとできない(というニュアンスで話した)。

**【大学卒業後のスポーツとのかかわり】**

大学がピークと考えていた。親の期待もあり、T県ではまだやり投げで1番であったため、出身地に帰って細々と競技をし、仕事しながら徐々にどこかで引退するというふうと考えていた。

**【引退を決めた時期と理由】**

国体の教員の部に出場、強化合宿などに参加して成績が向上。県のお金で大きな大会に出ていることに責任を感じて頑張った結果、ロサンゼルスオリンピック(1984年)代表になった。次の年がT国体で、そこまでは頑張らねばならないと目標を定め、目標を達成したので、指導者になることにして29歳で第一線からは引退した。

27歳で教員に正式採用された。試合で職場には様々に迷惑をかけた。

**【結婚について】**

32歳で結婚。仕事と家庭と、普通のことをやりながら仕事をすべきだと考えている。子どもは3名。子育て

ては義母がサポートしてくれた。結婚せずに仕事だけやっているのではいけない。また、実業団で競技を仕事のようにしているわりに、成績が上がらない選手がいる(歯がゆそうであった)。

#### 【競技者としての意識】

田舎でもできたので、誇りが強くなった。

#### 【女性アスリートとして大変だったこと】

大学卒業後、東京に残る可能性も示されたが、T県に戻った。一人で練習することはとてもきつく、できれば仲間が欲しかった。

#### 【次代の育成についての関心】

中学生の育成に関わっている(面接当日も強化練習中であった)。中学生は身体と心がなかなか一致しない難しい時期である。身体が動いても心がついていけない、心ばかり先走っても身体が出来上がっていないこともある。そのズレに気づく、一致するまで待つ、いずれも大切ではないか。

#### 【才能の活かし方について】

大切にしていることは次の3つである。

ていねいに投げること

素晴らしい練習環境だと感謝すること

練習できてあたりまえ、にならないこと

### ③Cさん

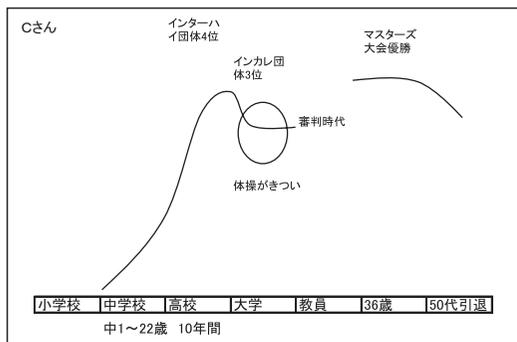


図3. Cさんの好不調のイメージ

#### 【競技者としてのピーク】

高校時代 インターハイ団体4位、個人9位

技術的には大学時代 NHK杯37位 インカレ団体3位 キャプテン

#### 【成育史】

小学校(公立) とくにスポーツはせずよく外で遊んで

いた。

中学校(公立) 器械体操の開始

高校(県立)

怖い監督、年中体操をしていた。管理されていた。高校3年で中国大会優勝。インターハイに出てから体操で大学に行けると理解した。

大学

高校3年生でTK大学から勧誘があった。素晴らしい先生がいた。国立大学に入学して親孝行できた。男子は競技者意識が強かったが、女子の同期には有名選手はいなかった。体操で進学したのに最初体操をやらぬと言って、主将から説得された。

高校に比べ、大学は自由であった。大学では、自己責任。自分で自分に厳しく。上手になっていくので面白かった。大学卒業時には、10年体操をしてきたので、もういいと考えた。4年のインカレが終わるまで継続、大学3、4年で理論系の研究室に入ったのは体操への抵抗。体操に染まりたくなかった。男女一緒に練習、仲良しで、学年コンパあり。協力し合っただけだったので、女子がというような大変さはなかった。

#### 【限界を感じたとき】

大学時代他大学に強い選手が山のようにいたので、太刀打ちできないと限界を感じた

大学4年インカレ終了後、引退。ホッとした。床、平均台は自己表現なので、楽しかった。床が好きだった。跳馬得意。段違い平行棒がつかった。大学ではピアノ生演奏で演技した。

#### 【大学卒業後】

T県に戻って高校非常勤、常勤講師5年で、やっと教員になった。教員になって、体操の審判として活動。卒業後にどっぷりと体操に入り込むとは思わなかった。体操の専門的な勉強をしておいた方がよかったかもしれないと今は後悔する。

#### 【陸上のマスターズ】

引退後、何もしていなかった。36歳頃に、陸上競技の人からマスターズに誘われた。公民館教室でエアロビクス、ジャズダンスなどを指導していた。バネはあった。柔らかいし、背面とびで30歳台で上に飛ぶ人はいなかった。教員になってすぐ陸上部の生

徒に背面とびを教えてもらっていたので跳べた。1m 43cm、いきなり30歳代日本新記録であった。国立競技場で優勝、メダルをもらった。リレーも行った。体操競技と全く違う世界なので、スタートの緊張もおもしろかった。どんどん勝ってしまい50歳過ぎまで続けたが、腰が痛くなったので、50歳後半で引退。陸上競技ではマスターズで競争している人がたくさんいるので、これからは走ろうかと思う。スポーツは何らかの形で現役で続けたい。

#### 【才能の伸ばし方】

器械体操があるから今がある。強い生徒を指導したことはない。ゼロの子を体操選手に育てた。頑張っている子に厳しく負荷をかけた。T県で国体があり、生徒を率いたので、全国に通用するまで育てなくて、と思って強い負荷を掛けたら、そこそこのレベルになった。

現在はジュニアをそだててはいけないという機運になっている。体操は小学生は多いが、中学になると県で数人しかいない種目もある。体操競技の指導は難しい。50代になって高校生に指導したら、スピードについていけなくなった。

#### 【スポーツ人生】

満足している。でも大学で少し嫌になった。しかし、離れるわけにいかなかった。T県の体操を背負っているのは数人、支えなければならぬ。教員になったので、恩返ししないといけないと思った。60歳になったので、終わりかと思ったらまだ忙しい。

#### ④Dさん

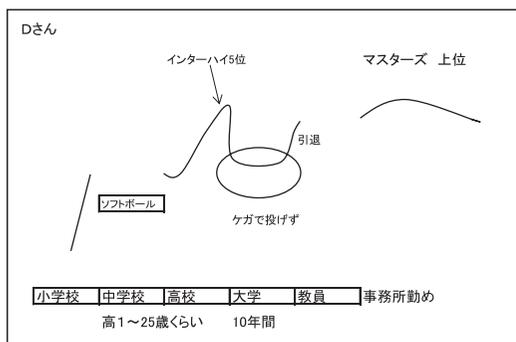


図4. Dさんの好不調のイメージ

#### 【最高成績】

高校3年 インターハイで砲丸、円盤、やり投げ入賞。やり投げは5位40mそこそこ。

#### 【競技者としてのピーク】

大学4年からの数年間。

#### 【成育史】

小学校(公立)

ソフトボール、など全部出ていた。実家(農家)の手伝いはした。

中学校(公立)

ソフトボール3年間、主将。陸上で3種競技出場予定だったがソフトボールの試合が重なって出場しなかった。ピッチャー。下半身強い(身長は158cm)。長兄は県のアマチュア横綱(国体選手、県相撲理事長)。父親は柔道、次兄は柔道、姉はソフトボールをしていた。

高校(県立)

ソフトボール部がなく陸上競技部に入部した。走るのはやや苦手であった。自分の力がストレートに出る。1年の春に、幅跳び、ハイジャンプ、砲丸、円盤 すべて7位であった。女子は一人だけで夏に猛練習した。1年秋の新人戦は前述の種目全部で優勝。2年からインターハイに出場。やり投げを始める。やり投げが一番自分に合っている。助走が難しかったが、走るのは速かったから問題なし。助走から投げられるにつながるおもしろさ、開放感ある。3年でもインターハイ出場。

大学への勧誘あり。3年の時TK大に行く決めていた。吉岡隆徳さんが高校に来たとあとから顧問の先生から聞く。練習中に良い記録が出ていた(インターハイで優勝するくらいの記録)ので、自分を伸ばしてくれる大学だったらどこでも良いと思った。オリンピックにも行けたらと思っていた。運動一本でいいと思っていた。TK大は学費が安かったし、奨学金も取っていたので親が期待して許可してくれた。

大学

けがをし、大学4年まで十分に投げられなかった。腰痛は高校2年くらいから。試合の前日に調子よすぎて、幅跳びの練習をして降りたときにズキンときた。そこから腰痛持ち。牽引してから試合に行くなどして

いた。高3インターハイ前、練習以外でころび肘を痛めた。大4年インカレの終わるころに普通に投げられるようになった。マネージャー的なことを1年から行った。競技で貢献できなかったが違う部分で貢献しなければと思った。

#### 【やり投げ選手としての特徴】

下半身の強さ。投げる技術があった。小さいときのソフトボールの影響だと思う。

#### 【大学卒業後】

大学のスポーツ研究所で2年間技官。教員が決まっていたが、大学4年の教育実習で自分に自信を無くして教員になりたくなかった。しかし、その後、東京で体育教員になった。

結婚のため退職、郷里に帰り夫の仕事の手伝いを行い、現在に至る。

#### 【現在のスポーツとの関わり】

陸上のマスターズ大会にかなり前から出場。そこそこの成績を上げている。ゴルフも行う。

## 5. 対象者のパターンの分析

図5は、4名のキャリアの変化を簡略化して図示したものである。

4名とも高校でインターハイに出場し、大学での専門を体育・スポーツに決め、大学でも競技を継続した。高校で良い競技成績を修めることが体育系大学進学に影響した。大学での競技生活は4名とも楽しいとは言っていない。高校時代の単純な思考が、大学生の年代でそのまま伸びていかないことが示されているようだ。Dさんは大学時代に怪我をしたが、競

技をやめることはなく、4年で試合に出ていた。しかし、競技だけに熱中する気持ちからは完全に遠ざかっていた。この高校・大学ギャップを解決する可能性が心理的サポートに託されているように思える。

一方で、現代の競技力の高い高校生は、体育系大学だけでなく進路は多様性がある(様々な大学でのスポーツ特別試験の存在)。そのことが彼らの成長に有益であろうか、その検証も必要であろう。

図5は、4名の現在のスポーツとのかかわりも示している。26歳、27歳で最高成績をあげ、スポーツ成績の満足度が高いA、Bさんは現在は成績を競うスポーツに取り組んでいない。それに対して、引退の早かったCさん、大学卒業後記録に恵まれなかったDさんは、マスターズ大会に参加し、Cさんは陸上競技で国内優勝、Dさんも上位成績で現在も出場しているなど、競技への関心が減じていない。種目の特性もあるだろうが、26、27歳での最高成績は、能力の高い選手にその年齢まで競技を継続させる必要性を示すのではないだろうか。また、Cさんの他種目でのマスターズ大会優勝は興味深い。

Dさんを除き、AさんとBさんCさんは大学卒業後出身地域で教員になった。これは、その時代に有力選手を教員として採用して国体の総合得点を稼ぐことがしばしばあったため、国体に出場する条件があったと思われる。また、4名とも結婚し、家庭を築いている。全員地方都市で就職したので、そこでは東京よりも女性は結婚するのが当然だという風土があったと思われる。Dさん以外は教員という安定した仕事について結婚して子育てをしている。とくにBさんはオリンピックに出場したため、結婚後のスポーツ指導でも

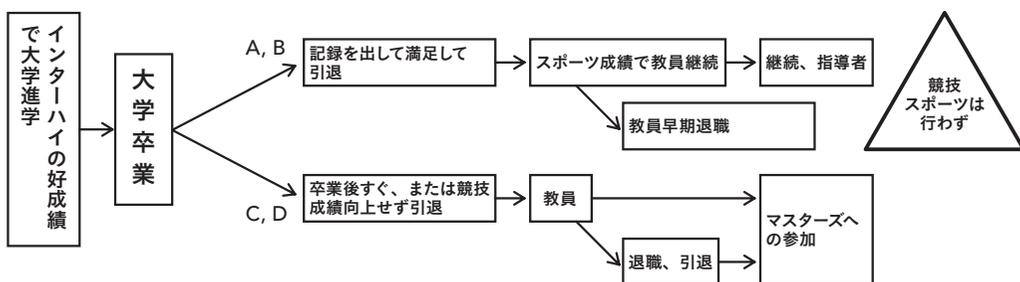


図5. 4名のキャリアのまとめ

まわりのサポートが見られ、今でも継続している。Aさんは指導に関心があまりなく、子育てに集中したようだ。一流選手の才能を社会がどのような工夫で守ったかが示されていると言えるのではないだろうか。ただ、その守り方は、体育・スポーツ特有の方法である。引退の早かった2名が形は違うもののまだ競技スポーツを楽しんでいる。ここに生涯スポーツを考えるヒントが隠されているかもしれない。

## 6. 結語

50歳代後半から60歳代の4名の女性一流競技者に面接調査を行った。対象者は高校時代の競技成績で大学進学をし、大学で競技者生活を送った。大学で記録が伸びたものはさらに競技を継続し、さらに成績を伸ばして引退した。大学でケガのため十分競技できなかった者、やっとの思いで継続したものは、引退は早かったが、年齢が高くなってマスターズ大会に参加するようになった。

この様子から、競技生活での満足度、目標達成の強さが、のちの競技スポーツへの関わりにつながるのではないかと予想された。ただし、すべての競技者が同じ道を通るかは明確ではない。しかし、目標を達成してしまうと、スポーツが継続されない可能性が示された。

また、一流競技者は20歳代後半まで競技を続けることで最高成績を記録する可能性があることは指摘できる。その時に一度成績が低下して、トレーニングをやり直しているようにみえるのが、興味深い。

## 文献

阿江美恵子、掛水通子、雨ヶ崎俊子(1997) 本学競技者に関する研究(4) —エリート競技者の心理的問題に関する分析— 東京女子体育大学紀要、32号、16-26.

Alferman, D. (2000) Causes and consequence of sport career termination in Career transitions in sport (Lavalley, D. and Wylleman, P. Eds.) Fitness Information Technology: Morgantown, WV.

江田香織、中込四郎(2012) アスリートの自己形成における競技体験の内在化を促進する、スポーツ心理学研究、39-2:111-127.

フリック、U.(2002) 小田博志、山本則子、春日常、宮地尚子訳、質的研究入門、春秋社:東京。  
林晋子、土屋裕陸(2012) オリンピアンが語る体験と望まれる心理的サポートの検討 —出来事に伴う心理的变化と社会が与える影響に着目して—、スポーツ心理学研究、39-1:1-14.

中込四郎(2012) 競技引退後の精神内科の適応、スポーツ心理学研究、39-1:31-46.

付記:本研究は東京女子体育大学・同短期大学研究倫理委員会の承認を受け、対象者には既定の謝礼をした。また、内容の公表についての許可は書面で得ている。個人を特定する内容については、削除したが、記録などは公になっているので、そのまま記載した。

また、本研究は、東京女子体育大学・同体育短期大学平成23年度、24年度の個人研究(学内申請方式)の予算で実施した。